『西鶴諸国はなし』「楽の男地蔵」の素材と方法

宮澤照恵

はじめに

『西鶴諸国はなし』巻二「楽の男地蔵」については、これまでほとんど取り上げられることがなかったが、最近、井上敏幸氏によってこの話の原拠を、『蒙求』の「薊訓歴家」に求め、本話を神仙譚として位置づける説が出された。[1]

本稿は、井上氏の説の検討を出発点として、改めて一篇の素材を探り、西鶴の作意および方法を読み解こうとするものである。

はじめに、「楽の男地蔵」の全文を掲げておく。[2] ただし、私にA～Gの七つの部分に分けて示す。

A　北野のかた脇に、合羽のこはぜをして、其日をおくり、一生夢のごとく、草庵に独住、おとこあり、

B　都なれば、萬の慰み事もあるに、此男はいまだ、西ひかしをも、しらぬ程の娘の子を集め、すける持あそび物を、こしらへ、是にうちまじりて、何のつみもなく、明暮たのしむに、後には新さいの川原と名

（二）

付て、五町三町の子共、爰にあつまり、父母をもたづねず、あそべば親どもよろこび、佛のやうにぞ申ける、

C　其後此男夜に入、月影をしのび、京中にゆきて、うつくしき娘を盗て、二三日もあいしては、又歸しぬ、是を不思議の沙汰して、暮より用心して、いとけなき娘を門に出ず、都のさはぎ大かたならず、きのふは六條の、珠数屋の子が見えぬとて、なげき、けふは新町の、椀屋の子を、たづねかなしむぞかし、

D　比は軒端に、菖蒲葺、五月の節句の、色めける、室町通の、菊屋の何がしのひとり娘、今七才にて、其さますぐれて、生れつきしに、乳母腰本がつきて、入日をよける傘さし掛て、行を見すまし、横取にして、抱てにぐるを、それ〳〵と声をたつるに、追かくる人もはや、形を見うしなひける、

E　此男の足のはやき事、京より伊勢へ、一日に下向するなれば、跡につゞくべき事、およびがたし、其面影を見し人のいふは、先菅笠を着て、耳のながき女と、見るもあり、いや臭の黒き、目のひとつあるものと、とり〳〵に姿を見替ぬ、

F　彼娘の親、いろ〳〵なげき、らくちうをさがしけるに、自然と聞出し、彼子を取かへし、此事を言上申せば、めしよせられて、おもふ所を、御聞あそばしけるに、只何となく、ちいさき娘を見ては、其まゝにほしき心の出来、今迄何百人か、ぬすみて歸り、五か三日はあいして、また親本へ、歸し申のよし、外の子細もなし、

G　かゝる事のありしに、今迄世間にしれぬは、石流都の大やうなる事、おもひしられける

仏のように慕われていたが、夜になると町中に行っては幼女を誘拐していた一人の男の話である。とはい

え、話はさほど単純ではなく、やはり背後に別々の素材が見え隠れし、それらを主人公の「此男」に結び付けて一篇を構成しているらしいことが、看取されてくる。つまり『名残の友』巻一「三里違ふた人心」の休甫や、巻二「昔をたづねて小皿」で道化役を演ずる月夜の四平を形象化したのと同様の手法がここでも用いられているわけである。それにしても、どのような意図が隠されているのか、不可解なもどかしさがつきまとう話である。

一

本話について、井上敏幸氏は

本話のモデルは、隣の児を抱き、落して殺してしまったが、二十日程たってその児を返しにきた、また、半日に千里を行ったといわれる蒙求「薊訓歴家」の薊子訓で、これに、古今著聞集十七の、七歳の子が誘拐され三日後に返されるという話をミックスしたものであろう。なお、薊子訓は神仙伝に記載された「有道」の人であり、そのために隣の児を殺しても罪にとわれなかった。本話の男が、京都町奉行から罪にとわれなかったのも、薊子訓がモデルだったからであり、本話の見出し「現遊」も、単に「夢うつつ」なのではなく、俗世間を離れた神仙に近い遊びという意味がこめられていたと思われる。

と述べておられる。[3]

右の結論に至る論証過程[1]において、井上氏は、本話の男の特徴を、1とてつもなく足が速い、2子供を盗んでは返す、3一生夢のごとくに草庵に独り住まいをする、4奉行に罪を問われない、という四点に集約され、これらをことごとく備えている人物として「薊子訓」を挙げ、本話の原拠と断定されている。こうして男の性格は神仏性によって説明され、一篇は神仙譚として位置づけられる。

もとより、提示された素材が「原拠」であるか否かという問題は、作者の深層心理に立ち入り、表面に見

（四）

えないところにさかのぼって議論しなければならない性格のものである。従って、非常に論じにくく、うかつに判定出来ないものであるが、以下あえて井上氏の説に疑問を呈しておく。

第一に、井上氏は薊子訓説話のうち「カツテ隣舎ノ嬰児ヲ抱カンコトヲ求ム。誤ツテ地ニ堕シテ死ス。児ノ家モトヨリ子訓ヲ尊ブ。スナワチコレヲ埋ム。二十余日ニシテ、子訓外ヨリ来リテ、児ヲ抱キテコレヲ還ス。（家コレ鬼ナルコトヲ恐ル。子訓スデニ去ツテ、掘ツテ埋ムトコロヲ視レバ、タヾ泥ノミ）」の部分[5]が「男地蔵」の子供を盗んでは返す点に重なるとして、不思議な行為を「一回のみではなく、何百回も繰り返させるということで、都を大騒動に巻き込む誘拐犯人を造形しえたのではなかったか」と述べられる。しかし、この説話にある「償いの意識」「蘇生譚」「一回性」「緑子」の一つ一つの要素は、どれをとっても「男地蔵」とは結びつかない[6]。

第二に、罪に問われない根拠を、井上氏は神仙性に基づく超脱性に求めておられる。しかし、これでは「奉行」対「神仙」という図式となって、ともすれば、神仙の優位性が示され、奉行の名裁きが際立って来ない。「男地蔵」の公事の場面は、当然、京都所司代板倉勝重・重宗父子を意識して書かれていようから、これでは不都合であろう。

第三に、「男地蔵」の基本にある「子供にまじって遊ぶ人物像」が、薊子訓説話からは浮かんで来ない。「男地蔵」全体を貫くトーンは、同じ「超脱」でも神仏性によるのではなく、「無垢」「遊び」といった言葉に集約されるもののように思われる。従って全条件を満たすモデルを求めるのであれば、子供と遊ぶ要素は不可欠であろう。子供にまじって遊ぶイメージは、むしろ日本の高僧説話にかいま見られる。

第四に、「足が速い、夢のごとく草庵に独り住む、奉行に罪を問われない」といった共通点を論拠とされている点であるが、これらの属性は神仙譚にはありふれている。章題に結び付ければ、複数の地蔵奇譚が思い浮かぶ[7]し、さまざまな霊験譚や、さらには、怪異譚にも当て嵌まる性格である。従って、「薊子訓」に帰着させる論拠とはなり得ない。

第五に、今仮に『本朝神仙伝』をひもとくだけでも、右の三条件を満たした上で「一の小き童」を盗んだ中算上人の話や、「年少き女子をのみ愛し」た教待和尚の話が見出される[8]。むしろ、これらの説話の方が、薊子訓説話よりも本話に近いように思われる。

以上、「薊子訓の行為と人となり」が原拠たるべきことをことごとく備えているという井上氏の結論に対して疑問を呈し、あわせて奉行とのからみや全体を貫くトーンという側面から、本話に「神仙性」を読み取ることの妥当性についても言及した。次節において、井上氏の説から離れ、改めて本話の素材と創作法を探っていくことにしたい。

なお、先に疑問を呈したことを、無に帰するようではあるが、ここで気になるのは、モデルを求める際にとられる井上氏の方法・手続きである。氏は、登場人物の条件をことごとく備える人物を捜し出すことに固執しているように見受けられる[9]。しかし、原拠とはそれほど全構成要素にかかわり、作品にあからさまな痕跡を残すものであろうか。むしろ、『西鶴諸国はなし』では、典拠になった話にさまざまな媒材を混入させて、原拠隠しを行う、あるいはもとの話を「あらぬことにしなす」というのが、井上氏の諸論考を含めた、これまでの成果であったはずであり、「男地蔵」も例外ではない。前節で述べたように、一篇の中には、いくつかの素材が見え隠れしているのである。

そこで、次節以下において改めて本話の素材を探るにあたり、まず西鶴がさまざまに用意している謎解きのヒントに注目し、それを手掛かりとしたいと思う。

二

既に指摘したように、この話は、さまざまな素材をもとにしており、それらを一人の「男」に結び付ける

（六）

ことで、統一性と起伏のある一篇に仕立てている。「此男」の他にも、全体を貫く要素として、「娘の子」「子供」「子」「うつくしき娘」「いとけなき娘」「ひとり娘」「ちいさき娘」などと表現される幼女が、一篇を通じてそこここに配される。これらの幼女と、「何の罪もなく幼女と明けくれ遊ぶ」と設定された「此男」とが織り成す話には、どこか「無垢」や「遊び」に通じるものが感じられる。以下、この点から話をすすめることにする。

本話の中心部にある室町通りの娘の誘拐を取り上げてみる。

ここでは、人知れず忍び込んでさらうのではなく、わざわざ人目に立つ通りで「横取りにして抱きて逃ぐる」のを、乳母・腰元が「それ〳〵と声をたつる」。ここに緊迫感は見られない。

本話の挿絵（図1）は、ちょうど男が娘を捕まえ、乳母と腰元が声を立てている場面である。乳母と腰元の手の動きや、余裕のある表情は、子供をさらわれる場面にそぐわない。また誘拐する男の側も、物腰がやわらかく、表情が穏やかなせいか、恐ろしさを感じさせない。本話に続く巻二の「神鳴の病中」、巻三の「蚤の篭抜け」等の挿絵と比較してみても、この図には緊張感が抜け落ちていることが了解される。

ところで、周知のように西鶴は挿絵に多くを語らせている。本書の挿絵はしばしばその章段の素材や作意を解く鍵を秘めているのである。[10] 挿絵に作者の意図を読み取る立場に立てば、この挿絵の緊張感の無さは一つの手掛かりとなろう。

図2は「子とろ」[11]や「鬼どち」[12]など、鬼遊びの図である。この絵と本話の挿絵（図1）とを比較してみると、本話の挿絵の緊張感の無さ、乳母や腰元の手の動き、全体の構図などは、「鬼遊びで鬼に捕らえられた図」に通じるように思われる。つまり、この挿絵からは誘拐というよりも鬼遊びの気分を濃厚に受けるのである。

図1では左中央から右上方にかけて軒が配され、よもぎ・菖蒲が挿してある。ありふれた端午の節句の景物であるが、ことさらそれを強調した構図には注意を払うべきであろう。[13] 古くからよもぎ・菖蒲は邪気を払うものとされてきた。例えば、全国に分布する民話「喰わず女房」では、追われる男を山姥（鬼）から救う

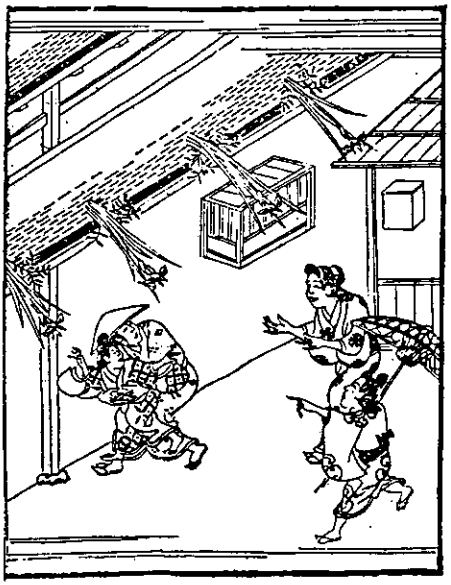

図 1

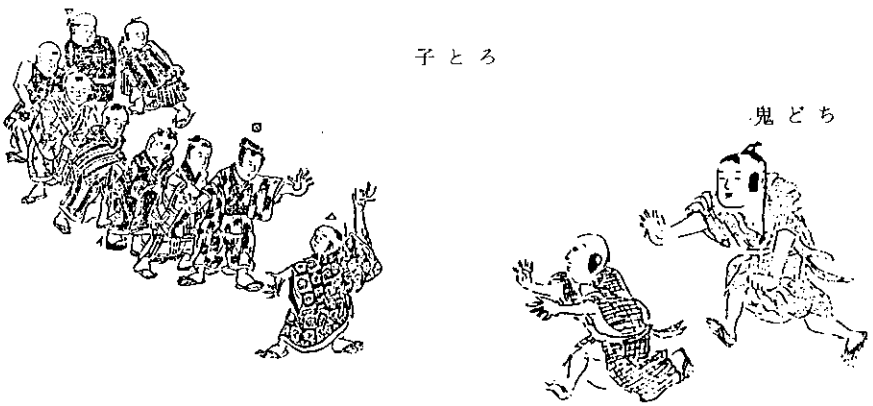

図 2

（八）

のはよもぎと菖蒲の繁みである。

即ち、もよぎや菖蒲を強調した挿絵は、本話の誘拐事件がそもそも身の危険や怪異性とは無縁のものであって、さらわれる本人に害の及ばぬものであることを示唆していると言えよう。ここに、西鶴の周到な仕掛けを汲み取ることができる。現実に「害の無い誘拐」はあり得ない。しかし「誘拐を遊びの一環と捉える」ならば、西鶴が誘拐場面の挿絵で菖蒲を強調した意図が了解されよう。

一方、一連の誘拐事件であるが、男は二・三日（五か三日）誘拐した幼女の相手をするだけで、何事もなく親元へ返している。つまり、短期間行方不明にはなるが、実害は全く無いわけである。このことと、本文Bの男の人物設定――「何の罪も無く子供と明け暮れ楽しむ」男――、及び散見する遊びの気分とを重ね合わせると、この誘拐は隠れ遊び[11]を連想させる。

罪に問われぬ点についても、奉行が男の行為の底に、以上のような遊びの要素を看取した、と考えれば分かりやすい。

この点に関連して、やや脇にそれるようであるが、童遊びの起源説話に注目しておきたい。

図3は法然寺蔵『地蔵縁起絵巻』の部分である[15]。この図は、ひふくめの起源を説いた『三国伝記』の次の記事[16]に対応する。

ひゝくめの事

わらんへのたはふれに、ひゝくめと云事は、恵心僧都、えんらてしこしわう経をみ給て、その心をえてはしめ給へり。

たとへは、こくそつ、さいにんを引てめいとにゆくとき、ちさうほさつ、かいもんしゆと云木のもとに立給て、さいにんをこひとり給。めいとはくらきところなる故に、にちせん菩薩を、ししやとし給。このほ

さつは、にちりんのことくに、くはうみやうを出して、万さうをかゝやかし給。しやはせかいにて、ちさうほさつに一花一香をもそなへたるしゆしやうをは、あたへ奉る。また、むえんしゆしやうをは、大し大ひのきやうくわんによつて、しこうしのとくのさいこうをてんすとて、をさへてうはひとり給へは、こくそつ、これをとりかへさんとてとるへし〳〵。ひく〳〵に、うはそく、うはいと申せは、ちさうほさつ、さいこうのしゆしやうなりとも、もし一善もや有らん。しやうはりのかゝみを見よ、と仰らるるなり。

ゑしんのそうつ、ちさうのひくはん、しん〳〵なる事をたつとくおもひて、はんにや院のちさうのまへにて、この経をかうしてのち、わらんへともを、おほくあつめて、両方へわけつらね、ちさうとこくそつとさい人を、とらん、とられし、とするありさまをまなんて、法楽にし給へるなり。はしめは取つゝ、ひくひくに、うはそく、うはひ、といひけるを、わらんへとも、まやゝちにいふとて、とりうゝひふくめといひけるなり。

されは、よしのゝてんのかはのへんさいてんの御前に

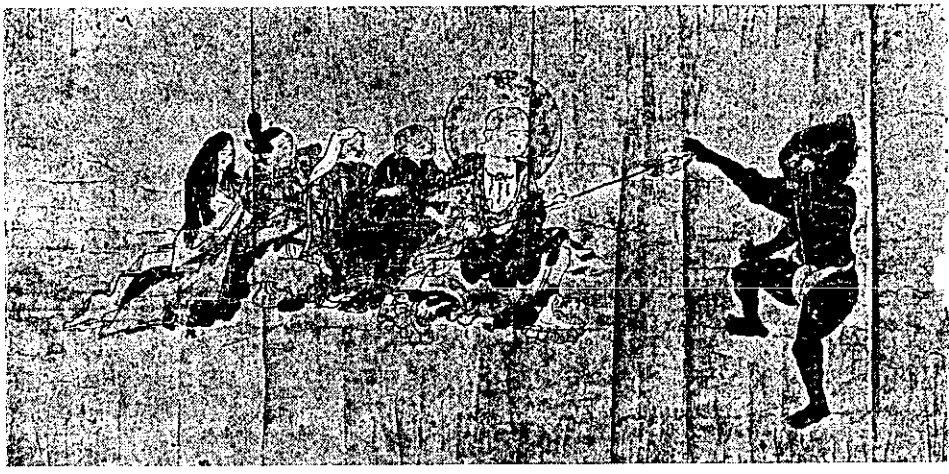

図 3

て、おひたるもわかきも、ひふくめをして法らくする事は、ほんち、地さうほさつにておはします故也。

（一〇）

（傍点筆者）

この起源説話は『骨董集』[17]『守貞漫稿』などに受け継がれている。

「ひふくめ」を「子とろ」と言い換えれば、『南総里見八犬伝』第一輯の口絵「八犬子髻歳白地蔵之図」が思い浮かぶ。外にも『絵本倭文庫』『尾張童遊集』[18]『物類称呼』『嬉遊笑覧』『絵本大人遊』[19]とさまざまな文献に書き留められており、中世から江戸時代を通じて盛んに行われた童遊びと知れる。一方、『三国伝記』記事中の「法楽」であるが、江戸時代にも弁財天の祭事に法納されていたことが、『塩尻』によって知られる。[20]即ち、「子とろ」は単に童戯というだけでなく、地蔵と結び付いた起源説話を持っており、実際に法楽として行われてもいたのである。

「子とろ」ほど顕著ではないが、盲鬼・隠れ鬼・鬼ごち等、当時行われていた一連の鬼遊びも宗教行事――神楽――に起源を持つ。それらを一つ一つ意識しないまでも『法華経方便品』[21]や「今様」[22]を思い起こせば、罪の無い童の遊びは「仏の種」であり、それに興ずるものを処罰するわけにはいかないことが確認されよう。こうして、それを見抜いた奉行の炯眼が強調されることになる。

挿絵や誘拐場面の描写に不可解さを解く謎解きのヒントが隠されていることを指摘し、そのキイワードは「遊び」であることを明らかにした。このことは実は目録小見出しにも明示されている。「現遊」というのがそれである。耳慣れない語だが、「天遊」や「夜遊」[23]などを意識した西鶴の造語であろうか。

ちなみに、「天遊」は『荘子』外物に「胞有重閒、心有天遊、室无空虚、則婦姑勃谿、心无天遊、則六鑿相攘、大林丘山之善人也、亦神者不勝」とあり、自然のままの自由な心を意味する語である。[24]即ち、小見出し

「現遊」とは、「天遊」の心を現実社会で持ち続ける余りに、法楽或いは童遊びの「子とろ」を現実社会での「子供を取る――返す」行為の繰り返しという形で実行してしまう――社会規範から逸脱してまで童と遊び続ける――そういう男のありようを示すことになろう。

つまり、予め、目録小見出しに遊びを意識した西鶴のねらいが示され、同時に、全篇に周到に遊びの気分が用意されていると考えられるのである。

三

一篇を通じて遊びの気分が流れており、「ひふくめ」の伝承が意識されていることを示した。しかし、その一方で京の人々には、この失踪事件のからくりは理解されない。「足が速い」という手掛かりを媒介にして、人々の意識の中の男は、「菅笠を着て耳のながき女」「只の黒き目のひとつあるもの」と、次第に異形のものになっていく。この部分は、遊びの側から考えれば、仮面をつけた鬼が人の子を追い回す「盲鬼」を連想させるが、それだけでは説明がつかない。この背景には、京の町における「神隠し」「かどわかし」事件、更には鬼の歴史が踏まえられていると見るべきであろう。

勿論、西鶴の時代にも、人買い・遊行聖等によるかどわかし・神隠し等、行方不明・失踪事件は珍しくない。『善悪因果集』には万治の頃、天狗にさらわれ、その眷属となって十二年後に親元に姿を見せた例が載る。その男には鳥の翼に似たものがあったという。天和三年四月には、叡山に給仕に上がった十五・六歳の子供が行方不明になり、七日後に戻った事件も紹介されている。この子供は山伏に連れられ、日光をはじめ、日本国中見物して来たと語る。[25] これらの採集された神隠し以外に、俳諧にも、子供を鉦や太鼓で探し歩く親の姿が掬い取られている。[26]

（一二）

しかし本文Cのように、王城の地で頻繁に起こる幼女失踪事件となれば、直ちに御伽草子の『羅生門』『酒呑童子』が連想されるし、謡曲『大江山』『隅田川』『花月』[27]、更に『古今著聞集』[28]や『沙石集』[29]の怪異説話、果ては『徒然草』の鬼騒ぎ[30]までもが二重写しとなって来る。こうした数々の伝承を重ね見ることによって、人々の意識の中で誘拐犯の男は鬼や天狗、山姥などの異形の姿となるのである。

即ち、一篇は一方で遊びの要素をちりばめ、一方で神隠しやかどわかしの伝承を踏まえて構成されていることになる。さまざまに描かれてきた京の失踪事件を、西鶴が「子とろ遊び」「隠れ遊び」にすり替えて見せた、というのが一篇の構図であろう。ここに西鶴の作意を読み取ることができる。その際、人々の意識には鬼や天狗の面影が残り、怪異事件として取り沙汰されるが、奉行はそのからくりを見通した、というわけである。

四

全体の構図を、「神隠しやかどわかしを遊びにすりかえたもの」と捉え、そこに西鶴の作意があると把握した上で、章題の「男地蔵」に立ち戻っておく。

西鶴は、子供と遊ぶことを楽しむ一方で、親からも喜ばれ慕われた無垢な男を、地蔵にたとえ、章題にすえた。「子とろ遊び」が地蔵起原説話をもつことや、「地蔵の二字は地にかくるゝとよ」み隠れ遊びを「白地蔵」と表記することなど[31]も、この命名に一役買っていよう。

しかし、それだけでなく、この章題の裏には、地蔵の付合である鬼が意識されている、と見るべきであろう。

本文は、主としてB・Cに「さいの河原」「父母[32]」「仏」「数珠」「椀」「笠」と、地蔵に縁のある語が綴られ

ている。同様に、B・C・Eの「さいの河原」「父母をたづね(る)」「女」[33]「不思議」「用心」「さはぎ」[34]「伊勢」[35]「笠」[36]「目ひとつ」などは、鬼とつながる語である。このように、本話には地蔵と鬼の両方のイメージが巧みに織り込まれている。この様相をもう少し本文にそって見て行くことにしたい。

本文Bでは、生き地蔵そのものの男が描かれる。Cへの移りでは化け地蔵[37]の気分も醸しだされるが、やはり「さいの河原和讃」そのままに「日の入相のそのころに鬼」が登場する、と読むべきであろう。いわばここで地蔵と鬼のすりかえが行われている訳である。

この地蔵から鬼への変身、つまり、地蔵と鬼との互換性は、男の側にしてみれば、先に述べたような、遊びの中での単なる鬼の交替なのである。事態は切迫するには至らない。一方、人々の側は、初めは不可解なままに、噂をしあい、行方不明の子を捜す。このCの部分の都の騒ぎは、『徒然草』第五十段が重なり合う。

しかし、遊び気分たっぷりのDの室町通りの娘の誘拐場面を境に、事態は急転する。地蔵と鬼の双方に共通する「足の速さ」を橋渡しとして、Eでは、人々の意識を通して男は一挙に地蔵から異形のもの(=鬼)に変貌して行く。ここには、男自身は無垢なままであっても見る側の意識の中で異形化してしまう、という人の心の不思議と、その意識を照射されることで、男も超越した能力を付与されていく、という不思議が読み取れよう。

こうして、遊びが怪異性を帯びてきたとき、Fで話を現実に引き戻す役割を担うのが奉行であった。

以上見て来たように、地蔵は、化地蔵のイメージや地蔵和讃を媒介にして、たくみに鬼にすりかえられる。男の側は遊びの鬼のつもりであっても、人々はそうは取らない。地蔵と鬼の互換性をめぐる男と人々の間の意識の隔絶が原因で、一旦は、無垢な男が異形化するところまで行くかに見える。しかし、最後に奉行によって怪異性は消し去られ、現実に引き戻されるわけである。右の地蔵と鬼との互換性とは、とりもなおさず、子供を鬼から守るはずの地蔵を鬼にすりかえるという西鶴の作意であったと言えよう。

(一三)

五

これまで、本話が「かどわかしを遊びにおきかえ、地蔵を鬼にすりかえる」という構図を持つことを示してきたが、一篇が公事で終わっている点は、この構図の枠外である。そこで本節では、唐突に公事の場を持ちだし、一篇のしめくくりとしている点についてその意味を考えておきたい。

この公事が『板倉政要』[39]を踏まえていることは先に指摘した通りである。西鶴は京都所司代板倉殿の公事咄に親しかったと思われる上、舞台が京で、紛糾した事態を収め、解説があって初めて得心のいくといった、凡人の考え及ばない裁きである点などから、この推論は妥当と考える。

さて、これまでに述べた奉行の役割は次の二点であった。

第一は、誘拐が罪のない遊びの延長であることを看取し、罰しなかった点。誘拐犯が異形のものと取り沙汰されたのは鬼や天狗伝承の投影であり、男の超越性もその逆照射であると見抜き、その上で怪異性を帯びていた事件を現実に引き戻したのである。

第二は、地蔵から鬼への変身が、男の側に立てば、遊びの中の地蔵と鬼との交替に過ぎないことを認めた点。

これらは名奉行にふさわしい洞察と言えよう。だが、何故ことさら締めくくりに公事を持ち込んだのかという点については、なお不審が晴れない。

ここで目を転じて、話の舞台になっている京都に注目してみる。

既に繰り返し確認したように、本話はさまざまな素材を含んでおり、それぞれを「此男」に結び付けることで、一篇は統一のとれた起伏ある話に仕立てられている。本文A～Gを通じて各素材を結び付ける機能を

果たしている語として、他にも

(北野)――都――京中――都――(六条)――(新町)――(室町通)――京――洛中――都

があげられる。これに寄り添うように、

娘の子――子供――うつくしき娘――いとけなき娘――ひとり娘――ちいさき娘

という幼女・子供が繰り返される。

即ち、一篇は、「此男」と「何百人かの小さき娘」の話に仕立てられているが、それを支え、緊密に結び付けている柱は「京」なのである。

京の付合として、まず浮かぶのは、「童」である。[39] これは、これまで述べた「遊び」「かどわかし」「鬼」「地蔵」と密接につながる語である。同時に章題に採られる「地蔵」もまた、よく知られる様に「京の町」と縁が深い。(例えば『京羽二重』には「名地蔵」として将軍地蔵、勝軍地蔵、矢田地蔵等、二十一体が記されており、[40] 京の地蔵信仰の隆盛を物語っている。)

ところで、本話に配される地名を挙げれば、

北野――六条――新町――室町通

となる。言い換えれば、

西陣――寺内町――諸職商家街――呉服問屋

であって、京都経済の二拠点に寺内町、職人商家街を挟んだ形である。つまり、町衆に焦点を当てれば、京都の商工業を物語る特色ある地域を効果的に選び取っていることに気付かされる。

さらに、「北野」の天神、「六条」の本願寺、それに章題の「地蔵」と並べて見ると、そこに京の人々の信仰の一面も、浮かび上がる。また、先に三節で述べたことであるが、本話の背景にある神隠し・かどわかし・鬼伝承の数々も京の歴史に裏付けられたものであった。

このように見てくると、本話には、京を構成し、特徴づける諸要素が実に多く盛り込まれていることが理解されよう。除外されているのは、島原、宮方公家、四条河原、寺方ということになろうか。[4] 但し、これらは、町方の子供たちからは、懸け離れた世界である。

裏返せば西鶴は、京の付合である「童」に注目し、京都から町方の子供につながる要素を切り取って並べて見せたとも言えよう。その結果が、「地蔵」「かどわかし」「天神」「北野（西陣）」「六条」「新町」「室町」ということになったわけである。（図4参照）

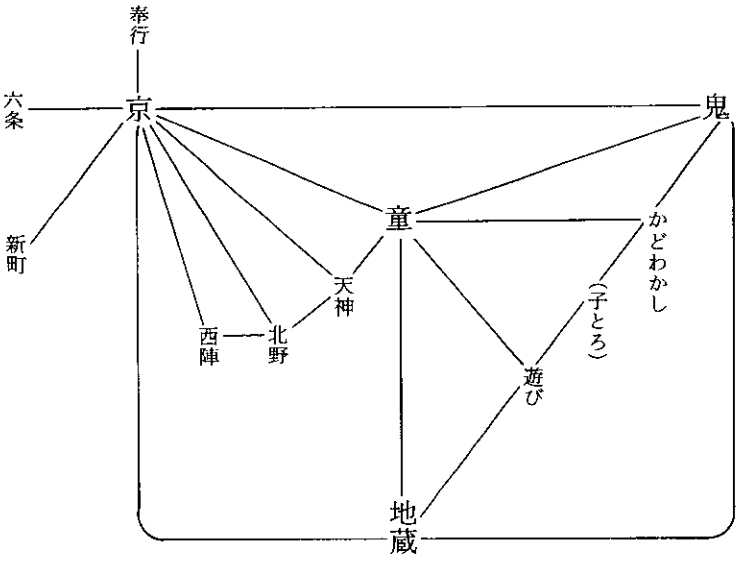

図 4

本話の諸要素が、何本もの糸によって「京」と緊密に結びついており（図4）、「都」「京」「洛中」の語が個々のエピソードの繋ぎとして繰り返し用いられていることに注目すれば、話を公事でしめくくった理由も自ずから明らかである。

即ち、奉行も京の町方にとって欠くべからざる要素として盛り込まれたと見るべきで、子供へのまなざしを持ち得、怪異伝承に捉われない立場として登場し、話を締めくくっているのである。

章末が「石流都の大やうなる事、おもひしられける」となっているのは、以上「都」を柱として緊密に結び付けた一篇の総仕上げと読み取れよう。

六

最後に、京の要素をさまざまに盛り込んだ一篇の中で、特に男の住まいを北野に、中心となる誘拐話を室町通りに設定した点に注目し、その意図に触れておく。

男の住む北野は、西陣を控える。『西鶴織留』巻六「官女のうつり気」には

鷺の局と申せし人。……北野の神へ御代参申されての下向に町筋の有さま目にめづらしく。駕籠の窓より小家がちなる西陣のほとりを通られしに。……今織りのはた音せし門に乗物たてゝ軒下に休みぬ。此内に摺鉢のおときこえて下女ことりまはしにはたらきければ。いまだ年若なる内義がつゐ腰掛ながらうつくしき手して。若菜をそろへ、鏡餅の名残を雑煮して。我夫をもてなす風情あるじは中敷居枕にして心よげに足を延て。

（一七）

と、心やすい町屋の典型として描写されている。[42]

また、『天満千句』第二に

家〳〵の簾いかのほり也　　西似
西陣や京わらんへの夕間暮　　直成
名のなき事は北野の松原　　武仙

とある[43]ように、童の遊び戯れる声が聞こえて来る町である。千本通りには閻魔堂が控え、鐘や太鼓で我が子を探し歩く親の姿を見かけることがある。[44]又、天神境内には、五輪石塔が立ち、[45]北野はまさに男地蔵の住み所としてふさわしい場所である。

それに対し、室町通りは、京の商業の中心地で富裕な呉服問屋が軒を並べる。その様は『日本永代蔵』『西鶴織留』などに散見する通りである。室町通りの婦女と言えば、「仕出し衣装の物好み当世女の只中広京にもまたあるべからず」と言われた『好色五人女』のおさんが思い浮かぶ。本話の菊屋の娘は、文字どおり「おうば日からかさ」で、西陣の子供たちのように、自由に外で遊ぶことは出来ない。

この二つの地域は、あらゆる面で対照的でありながら、共に絹織物を通して興隆し、京都の経済を担っている。西鶴が、京の町を柱に「男地蔵」の話を書こうとした時、この二つの土地を選び採ったのには、それなりの必然性があったことが頷ける。

ところで、北野には右に述べた以外に「抜け」と呼んでもよい仕掛けが込められているように思われる。確かに、千本通りに閻魔堂を控え、「石塔」を付合に持つ町外れの北野片町は男地蔵の住み所としてふさわしい。しかし、それだけでなく、北野といえば、天神を思い浮かべないわけにはいかない。

この時代の天神は、既に雷神のイメージはなく、子供の守り神、手習い・学問の守り神として定着している。それと同時に説話に裏付けられた[16]「雪冤の神・正直を守る神」としての信仰も健在である。例えば、『大矢数』第五の付合に、

是も思へは天神七代
正直は俄分限にとゝめたり

とあり、[17]同じく第六に、

真ある神の誓の南无天満

の句が見られる。[18]よく知られている『天神記』の詞章はこうした天神信仰を雄弁に物語っていると言えよう。

子供たちにとって天神は暮らしの中にあり、特に天神講は自分たちで取り仕切る楽しみの一つであった。更に、天神は七歳の節目を無事通過させる守り神とも言われる。[19]

このように見て来ると、本話の主要素である「童」「北野」「七歳」「正直」「雪冤」が、すべて天神と強く結び付いていることが確認されよう。

つまり本話の表面には天神は一切登場しないが、大枠として話を方向づけているのである。読者は背景に天神が隠されていることを発見し、西鶴の仕掛けを楽しんだと思われる。西鶴は章首で男の草庵を北野に設定することで、

○菊屋の子供に何の子細もなく、
○正直者の男地蔵は罪に問われない

(一九)

という伏線を冒頭から準備していたわけである。

本来ならば、ここで天神が正直な男の冤罪をすすぐ筋書きになるのであるが、西鶴は代わりに奉行を登場させ、裁きの場において無実を示したのである。名奉行は一見唐突に登場するのであるが、実は、このように天神の役割を担うよう予め意図されていたと言えよう。

ここで改めて、北野に住む主人公の「此男」に取り込まれた諸要素を確認しておく。基本的には、恵心僧都や空也[50]をはじめとして、西行、あるいは本書より後の時代になるが、行智、良寛などに連なる人物像を面影としていると思われる。そこに子供を守る神仏である地蔵および天神の伝承や信仰をも取り込むことによって、「此男」は全く邪気の無い、無垢な人物として形象化されているのである。従って、一連の誘拐は、西陣の子供たちだけでなく、京中の子供たちと遊びたいという願いの表れと解釈できる。西陣と対照的に、子供らしい遊びを体験できない室町通りの娘が中心部に据えられるのも、こう考えれば当然の帰結であろう。

おわりに

井上氏の説に疑問を呈し、西鶴の仕掛けや謎ときのヒントに注目して、一篇を読み解いてみた。「原拠は何か」という氏の問いを繰り返せば、本話は特定の原拠を元に脚色されたものではないというのが私の結論である。

京のそこここで見掛ける地蔵堂、鐘や太鼓で迷子を捜し歩く親の姿、無心に遊ぶ子供たち、神隠し事件等々、現実の社会における見聞をもとにして、それに地蔵伝承、天神信仰、古典にみられる行方不明事件、鬼騒ぎ、高僧説話、遊び起源説話などを重ね合わせ、「京」と「童女」を核に「此男」を形象化したというのが、一篇

の作られ方であった。そこに公事を取り合わせてしめくくっているのも、「京」や「天神」とのつながりによる必然である。

また、一篇にこめられた仕掛けに注目すれば、西鶴の作意の一つは、かどわかし・神隠し・行方不明事件を、子とろ・隠れ遊びにとりなした点、もう一つは鬼から子供を守るはずの地蔵自身を鬼にすりかえる点にあった。さらに一篇の大枠に「天神」を置きながら、それを明示しない「抜け」の手法も用意されていた。

確かに「地蔵のような男がいたが、彼は一方で童女誘拐犯であり、鬼の一面をも持つらしい。誘拐が露見して裁きの場に立つが、罪に問われることもなかった」という不可解な話は、男の側、世の人々の側、それぞれの「人の不思議」をかすめてはいる。しかし俳諧を嗜むほどの読み手であれば、より興をそそったのは、この「不思議」よりも、むしろ一行一行話の移りをたどり、小見出し・挿絵等に隠されたヒントを手掛かりに、西鶴の仕掛けた転合化の跡を解明して大笑いすることではなかったかと思われる。この話は、まさに「抜からと心行のつけかたとて其座に一人も聞えず我計うなつきて一句〳〵に講釈大笑ひより外なし」[31]を散文に移し替えた話だったのである。

［注］

1 井上敏幸「『西鶴諸国ばなし』三題」江戸時代文学誌7、一九九〇年12月。

冨士昭雄・井上敏幸・佐竹昭広『好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』新日本古典文学大系76、一九九一年10月、岩波書店。

2 吉田幸一氏所蔵本による。但し句点（黒丸点）は総て「、」とした。

3 前掲（注1）新日本古典文学大系、三一二頁

4 前掲（注1）論文。この論考では、「原拠を見定める」ことに主力が注がれている。

5 前掲（注1）論文による。これは天和三年刊の『蒙求詳解』の書き下し文である。『蒙求』「薊訓歴家」は、諸写

（二二）

本、古活字本共に共通性が高い。左に文禄五年刊古活字本『徐状元補註蒙求』の「薊訓歴家」の全文を掲げておく。

神仙伝薊子訓斉人挙孝廉除郎中又為都尉人莫知其有道在郷里常以信譲与人二百余年顔色不老曽求抱鄰舎嬰児誤堕地死児家素尊子訓即理之二十余日子訓自外来抱児還之家恐是鬼子訓既去掘視所理（ママ）但泥而已又諸老人髪白者子訓与体坐共語宿昔皆還黒京師貴人莫不虚心欲見争請子訓比居太学諸生為請子訓々々曰我某月日当往到期子訓以食時発日中到未半日行千余里乃見書生問誰欲見我郷尽語之吾日中当往到日中子訓果往二十三処諸貴人喜自謂先詣之明日相参問各言子訓衣服顔色如一而所論説随主人所諮不同遠近驚異子訓去乗青騾出東門陌上徐々行諸貴人走馬遂不能及行半日而相去常一里許乃止

池田利夫編『蒙求古註集成別巻』（一九九〇年1月、汲古書院）三四〇～三四一頁

6 「地蔵」と「蘇生」のつながりは、多くの霊験譚によって裏付けられている。しかし本話章題の「地蔵」は、蘇生に連なる死後の守護神の意味で用いられているわけではない。単に子供とまじって遊ぶ姿を地蔵伝承に重ね合わせているのであるから、蘇生譚を面影として形象化したとは考えにくい。

7 清水寺勝軍地蔵、金台寺矢取地蔵、壬生寺縄目地蔵等の縁起が思い浮かぶ。逆に桂地蔵にまつわる騒動（『看聞御記』応永二十三年七月十六日及び十月十四日の記事参照。　続群書類従、補遺二、三十～四十四頁）は、足が速く、不思議な霊験を表す地蔵奇譚が広く流布していたことの証となろう。

8 「中算上人童事第卅二」　川口久雄校註『古本説話集　本朝神仙伝』（日本古典全書、一九六七年9月、朝日新聞社、三八五頁）および「教待和尚事第十四」（同三五二頁）

9 氏は、初めに本文Dの類話として御伽草子に見られる誘拐や『古今著聞集』の変化の中の話を提示されるが、これらが本話の梗概と一致しないことから、原拠とみなすことは出来ないとされる。『古今著聞集』の話については、素材と認めた上で「犯人が堂々と姿を見せている点、及び犯人の足の早さについては、（本話と決定的に異なるので）いま一つ別種の素材が典拠として用いられていると推測」され、引き続き本話の全条件を満たし得るモデルを求め、その結果、薊子訓に到達された。

10 巻一「公事は破らずに勝」、巻四「忍び扇の長歌」、巻五「恋の出見世」等で指摘されている。なお、巻五「楽の鱆鮎の手」の挿絵の動物や団扇が素材を示唆していることを、拙稿で述べたことがある。(「楽の鱆鮎の手」の素材と方法――『西鶴諸国はなし』の研究――」国語国文研究82 一九八九年3月)。

11 『守貞漫稿』による。(『類聚近世風俗志』一九七七年11月、日本図書センター、三二五頁)

12 『尾張童遊集』による。(『日本歌謡研究資料集成』第八巻、一九七七年2月、勉誠社、三九七頁)

13 『好色一代男』巻一「人には見せぬ所」 本文に「あやめ葺かさぬる、軒のつま見越の柳しげりて」とあるが、挿絵は菖蒲が見えない構図である。

14 「隠れ遊び」は、西行の歌に「むかしせしかくれ遊びになりなばやかたすみもとによりふせりつつ」(『聞書集』「嵯峨にすみけるにたはぶれ歌とて人々よみけるを」歌群)とあるのをはじめ、俳諧にも『続山井』の「小桜もせよや風にはかくれんぼ 守昌」(古典俳文学大系2、貞門俳諧集二、一九七一年3月、集英社、五三七頁)他の例がある。身近な題材であるから、西鶴が下敷きにしていたと考えても不都合はない。

15 梅津次郎「法然寺蔵地蔵縁起絵巻に就いて」(美術研究一四三、一九四八年4月)による。

16 名古屋三国伝記研究会『三国伝記〈平仮名本〉中』古典文庫四三六、一九八三年1月、三六五頁

17 『骨董集』に図3の『地蔵縁起絵巻』と同種の図が掲載されており、「これは古画にあらず三国伝記の文(ことば)のおもむきをしらさんとて今あらたにつくりいでたる図なり」の詞が添えられている。(日本随筆大成第一期15、一九七六年1月、吉川弘文館、五一四~五一五頁)

18 「子とろ」と同様の図を「道成寺」の名で掲載し、

おに後ろの子をとらへよふとする又後にてはとらへまいとする

と説明する。前掲(注12)書四〇六頁

19 続編巻之中に「子かを」の名で掲載する。日本庶民文化史料集成9、一九七四年6月、三一書房、一六七頁

20 「和州天の川弁才天の祭に、夜に入りて小児を集め並べて歩行せしむ。又予め鬼形の出立したる民を幕内に置きて、走り出て彼小児を執らんとするを、法師も小児も、同音に文(ふん)を唱へて是を追ふとかや。是又鬼走の変風か。

或人曰く彼唱る所の文は、閻羅天子経の文也。弁天の本地地蔵薩堆と習ふ。彼の経に此の行法ありといへり。」（日本随筆大成第三期17、一九七八年1月、吉川弘文館、二七三頁）

21 乃至童子戯　聚沙為仏塔　如是諸人等　皆已成仏道……乃至童子戯　若草木及筆　或以指爪甲　而画作仏像　如是諸人等　漸漸積功徳　具足大悲心　皆已成仏道

22 「平等大慧の地の上に　童子の戯れ遊びをも　漸く仏の種として　菩提大樹ぞ生ひにける」『梁塵秘抄』（日本古典文学大系73、一九六五年1月、岩波書店、三五四頁）

23 『俳諧類船集』に次のような記載がある。

夜遊（ヤユウ）　日待　庚申（カウシン）　舞楽　月見　蛍見　鵜船　虫えらぶ　管絃

夜遊人欲尋来把寒食家応折得驚云々。馬頭藤式部なとのすきものか物かたりこそ聞あかさらまし。赤壁両度の賦は今の世にも見て只其時の心地するならし。短檠（タンケイ）を捨て長檠をもてはやして夜遊をことゝするとは韓退之はあざけりたり。

（近世文芸叢刊Ⅰ、一九六九年11月、般庵野間光辰先生華甲記念会、三一三頁）

24 『近代艶隠者』巻一ノ二に「天遊」について次の記述がある。

両所の武名至隠のいたることは我にすぎたり。然れども心にいまだ天遊をしる事すくなし。我むかし芸州の城を枕し。死爰に極めんと思ひし時は。勇を知りて道をしらず。今は天性の自然にもとづきし。我境界を二人に語らん。夫市中を市中にかくし。人家をかまはぬ野径とし。まつことなきを常とするは。天遊のはしめ也。身を山中にかくし。人を去て己を誇るは。身をのがれて心をのがれず。己を遠ておのれを立る物也。是非を捨て人と共に楽み。名を恐れて跡をなさず。我を知りて我をしらず。是を天遊の至徳といふ。

（近世文学資料類従西鶴編23、一九七五年8月、勉誠社、二二頁）

25 宝永八年版本巻四　七丁表～十一丁裏（鹿沼市立図書館蔵大欅文庫本による）。

26 迷ひ子は都の西と聞こえたる　宗因

日も入相のかねと太鼓と　　弘氏

『宗因七百韻』（近世文学未刊本叢書談林俳諧篇一、一九四八年6月、養徳社、一七七頁）

鉦たいこ千本通り尋行

27 『大矢数』第十八（定本西鶴全集第十一巻下、一九七五年3月、中央公論社、一六五頁）

談林派と目される俳諧では『花月』の「さてもわれ筑紫彦山に登り七つの年天狗にとられて行きし山々を思ひやるこそ悲しけれ」による「天狗―とられ行く―七歳」の付合が頻出する。西鶴も好んで用いている点は、本話Dの設定を考える上で注意してよかろう。

28 井上敏幸氏は前掲（注1）論文で『古今著聞集』巻一七「御湯殿の女官高倉が子あこ法師失踪の事」を素材の一つと見なされている。この話は後半

（あこ法師は）なへ〳〵として、いける物にもあらず、物もいはず、たゞ目ばかりしばたゝきけり。験者・よりましなどすへていのるに、物多くつきたり。みれば馬のくそなりけり。三たらひばかりぞ有ける。されどもなを物いふこともせず、よみ帰りのごとくにて……

（日本古典文学大系84、一九六六年3月、岩波書店、四六九頁）

とあるように、神隠しの例である。本話Dの素材は必ずしも一つに限定されないが、この話も視野に入っていたであろう。『古今著聞集』には他にも天狗神隠しの話が載る。

29 「天狗ノ人ニ真言教タル事」（日本古典文学大系85、一九六六年5月、岩波書店、三一七頁）

30 『徒然草』第五十段が都の幼児失踪騒ぎの引き合いに出された同時代の例として、『新御伽婢子』巻二「人喰姥」に

明暦の比にや壬生の水葱宮に人喰姥といふもの住て幼子共を取喰ふと沙汰して洛中城外の騒数日止ざりき応長の比伊勢の国より女の鬼に成たるをゐて登りしとて京白川のさはぎけると。つれ〳〵に書しに似かよひたる事にて誰見たるといふ人もなく虚言ともいはでいつとなく静りぬ

（古典文庫四四一、一九八三年6月、七六頁）

（二五）

とある。本話への影響が考えられよう。なお『徒然草』の都の騒ぎは本話C及びEと重なる。

31 『千種日記』巻二「洛陽留止記」（天和三年三月）で眼疾地蔵堂に触れて「地蔵の二字は地にかくるゝとよめり」と述べている。（古典文庫四四九、一九八四年2月、八四頁）
また『書言字考節用集』巻八言辞門に「白地蔵（カクレンボ）小児遊戯」とある。これについて『守貞漫稿』では、「書言字考に白地蔵の三字をかくれあそびと訓ぜるは白地にかくるゝかりそめの遊と云心ならん」と説明している。（前掲（注11）書、三二七頁）

32 『俳諧類船集』（前掲（注23）書）では、地蔵、さいの河原、父母が相互に付合となっている。

33 鬼と女は『俳諧類船集』及び『毛吹草』（岩波文庫、一九四三年12月）で付合に挙がっている。

34 『徒然草』第五十段による。

35 同右。

36 鬼すらも宮の内とて蓑笠をぬぎてや今宵人にみゆらむ　『躬恒集』（新編国歌大観一八五番）
あみた笠ぬいて久しや鬼の皮　定俊
『二葉集』（前掲（注26）書、談林俳諧篇、二三四頁）

37 小磯の地蔵が名高いが、『一目玉鉾』には東海道と奥州の二か所に化地蔵が記されている（近世文学資料類従西鶴編22、一九七五年5月、勉誠社、四〇頁・七四頁）。また、『大矢数』第三十三に
地蔵の化妖あらはれて月
の句が見える。（前掲（注26）書、二七一頁）

38 『大矢数』第三十二に、
是あとしきの公事を聞るゝ
風も立ず波も静に周防灘　（前掲（注26）書、二六六頁）
第二十二に、

聞及へうたん公事の埒明た　（同一九六頁）

とあり、『世間胸算用』巻二「尤始末の異見」に

夜食は冷飯に湯どうふ干ざかな有あいに借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄しをさせことはりなしに高枕して腰元に足のゆびをひかせ茶は寐ながら内儀にもたせ置て

とある。（近世文学資料類従西鶴編14、一九七七年12月、勉誠社、七九頁）

39 京都と童は『類船集』で付合にある。

40 増補京都叢書第六、一九三四年7月、増補京都叢書刊行会、七三頁〜七四頁。

41 なお、このうち宮方公家は巻一「見せぬ所は女大工」の話の舞台である。町方の無常は巻三「面影の焼残り」で描かれる。

42 『西鶴織留』（近世文学資料類従西鶴編16、一九七六年2月、勉誠社、二一七頁）但し、振仮名は省略。

43 前掲（注26）談林俳諧篇、八頁）

44 人の不足の閻魔大王

鉦たいこ千本通り尋行

『大矢数』巻十八（前掲（注26）書、一六五頁）

此律義閻魔大王合点也

千本通まつすくにゆく

『大矢数』第三十八（同、三一〇頁）

45 北野と石塔は『類船集』で付合にある。

46 『古今著聞集』和歌第六に「小大進歌に依りて北野の神助を蒙る事」（前掲（注28）書、一六一頁）及び「阿闍梨仁俊北野社に祈りて詠歌し感応ある事」（同一七〇頁）がある。いずれも同じ話が『十訓抄』『北野縁起』等にも見られ、前者は『沙石集』にも載る。

47 前掲（注26）書、六八頁

48 前掲（注26）書、七七頁

49 宮田登氏は、童謡「通りゃんせ」に見られるように、天神には七歳の子供を守護するという基本的な機能があると指摘されている。『天神伝説』（太陽スペシャル、一九八七年10月、平凡社）八一頁。

50 『雲錦随筆』巻四（日本随筆大成第一期3、一九七五年4月）一四一頁〜一四二頁に、

世に佐比河原を冥途にて小児の集る所とし、且地蔵尊これを化益し給ふといふは、……往昔空也上人松尾明神へ日参し給ふ砌、西院の河原を往来し給ふに、里の児童あまた出て上人の衣の袖、或はつき給ふ杖などに携りて戯けるが上人殊に憐み給ひて、時々菓子など与へて愛し給ひし姿を写して画しを、後世地蔵菩薩とせし者なるべし。

とある。この話は他に裏付けはないので、流布の程度は不明である。他に、七歳ばかりの子供が父母を亡くして泣いていたので、空也が諭すと泣き止んだという話が『古今著聞集』巻第十三（前掲（注28）書、三六四頁）に載る。単に子供を愛し慈しんだ高僧という以上に本話への影響が考えられる人物である。

51 『大矢数』第四巻跋文（前掲（注26）書、三二六頁）。

北星学園大学経済学部　北星論集第29号開学30周年記念号　正誤表

頁・行目	誤	正
76頁 図2-2下から6行目	親言語インターフェース	親言語インタフェース
79頁　式（2-7）	a_{1k}	a_{ik}
86頁　3-4-2節	［表3-6］に示す。の次行 欠行（4行）	(a) SQL Base, informix SQL, R：BASE Pro (b) 日本語UNIFY, MRDB,10BASE Ⅲ (c) dBASE Ⅲ PLUS, dBXL, dBASE Ⅳ (d) その他
95頁　［表4-6］中	（K）桐ver. 2	（K）桐ver. 3
210頁　1行目	必要とす	必要とする
211頁　12行目	していおり	しており
213頁　13行目	類型はめ	類型にはめ
233頁　11行目	の向かって	に向かって
235頁　10行目	Die Unendliche	Die unendliche
236頁　下から6行目	Kler-	Klei-
244頁 Table2＆Table3	Studests	Students
255頁　1行目	Learninfg	Learning
262頁 Table27＆Table28	Type 1 **, Type 2 **, Type 3 **	Type 1 *, Type 2 , Type 3
263頁 Table29＆Table30	Type 1 **, Type 2 **, Type 4	Type 1 *, Type 2 , Type 4 *
288頁　16行目	買える	かえる
290頁　8行目	小売店	小型店
356頁　6行目	D	D・E